

セネガルにおけるギニア人

0 はじめに

本稿はセネガルに暮らすギニア人移民の暮らしや習慣、セネガルにおける立場などを概観したものである。セネガル在住のギニア人はかなりの割合がプル族であると考えられ、ギニア人移民一般というよりは、セネガルに暮らすプル族ギニア人一般と言った方が正確であるかもしれない（ギニア中西部のフータ・ジャロン地方出身のプル族が特に多い。民族を聞かれて「プル・フータ」と答える者であれば、出自はギニアであると考えてよい）。

1 ギニア人とセネガル入国

セネガルに滞在するギニア人人口は、一説には20万人とされるが、実際にはこれをはるかに上回っていると考えられる。セネガルと同じく ECOWAS 加盟国であるギニアの国民はセネガル渡航の際にパスポートやビザを必要とせず、入国は容易である（そのため、正確な統計をとることは極めて困難でもある。2013年の国勢調査によると、セネガル在住ギニア人は合計 86,085 人と、上記の説を大幅に下回っている）。また、陸路で南部コルダ州付近に入国した後、現地で 5000~10000Fcf 程度の代金と引き替えにセネガル人としての ID カードを不法取得するという手段も広く取られている。セネガルに暮らすギニア人にはプル族が非常に多いが、コルダのセネガル人においてもプル族の割合が高く、Diao (ジャオ)、Diallo (ジャロ) など共通の姓が多いため、同地の出身者であるかのように見せかけて ID を取得するのである。また、2007年の大統領選挙の際、再選を狙うウッド大統領（当時）は、票集めを目的に多くのギニア人にセネガル国籍を与えたとも言われている。

2 ギニア人と商売

ギニア人のセネガル移住の動機は、大まかに分けて二つあると考えられる。一つは、セク・トゥーレ初代ギニア大統領の時代に、マンディンカ族である同大統領のプル族迫害を逃れての移住²、もう一つは経済的理由である。彼らは特に、セネガル人があまりやりたが

¹ セネガル国内にも「フータ」という地名があり（北東部のセネガル川流域、正確には「フータ・トロ」）、住民の多くがプラール語（プル語）を話す、彼らは自らを「トゥクルール族」と定義している。両「フータ」の共通点として、それぞれセネガル及びギニアのイスラム化において非常に重要な役割を果たした地であるということが挙げられる。

² セク・トゥーレはプル族に限らず政敵やその他の少数民族を大々的に迫害したが、その在任中にセネガル、コートジボワール等の近隣諸国に脱出したギニア人の数は、全人口 500 万人のうち 200 万人に達すると言われる（勝俣誠『現代アフリカ入門』1991、岩波書店）。プル族はギニアにおける最大多数民族であるにもかかわらず、政治的には比較的冷遇されており、独立以来プル族で大統領の地位に就いた人物はムサ・ダディス・カマラ（任期 2008 - 2010）のみである。なお、ギニアの人口に占める民族比はプル族 40%、マンディンカ族

らない零細商人などの職に多く就いている。ダカール市内の市場の野菜売り、魚売り、果物売り、道端の水売り、ココナッツ売り、コーヒー売り、屋台のレストラン店主、ブティック店主などは、かなりの割合がギニア人であるという。また、ダカールでは時々ウォロフ語が通じず、おまけに市内の道をよく知らないタクシーの運転手に出くわすが、彼らの多くも（おそらくはセネガルに来て日が浅い）ギニア人である。道端の物乞いにもギニア人は多い。1989年のセネガル・モーリタニア紛争を経て国内のモーリタニア人口が激減して以来、国内で最も目に付く外国人と言えばギニア人のようであるが（2013年国勢調査によると、セネガル在住の外国人に占めるギニア人の割合は47.4%）³、かつてこれらの職業はモーリタニア人のものであったという。なお、同じ近隣諸国の国民でも、ギニアビサウ人は言葉の問題からあまりセネガルにはやって来ず、ガンビア人は多少いるものの、彼らは「プライドが高いので」こういった物売りなどはやりたがらず、まして物乞いなど絶対にしないのだという。マリ人はもう少し多数派で、ギニア人ほどではないものの積極的に商売を行う姿が目立つが、彼らが売るのは染料やチューライと呼ばれる香、シアバター、枝を束ねて作った箒など、マリならではの品物が目立つ。道端でグリグリと呼ばれる護符を売っているのはニジェール人である。

3 ギニア人とイスラム

ギニア国民の85%がイスラム教徒であるとされるが⁴、特にセネガルに移住するプル族はほとんどがイスラム教徒であると推測される。ダカールにおいても、特にギニア人移民の多い街区では、モスクを訪れる礼拝者の多くが当然ながらギニア人である。ただし、ギニアのイスラムの特色として、セネガルに比べてやや原理主義的なところがあるという（ダカール市内でも稀にアラビア半島の女性のように目だけを残して全身を黒い長衣ですっぽりと覆っている女性を見かけるが、多くがギニア人であると推測される）。セネガルのイスラムにおいてはムリッド、ティジャーニといった教団（*confrérie*）が幅を利かせており、各教団の総カリフから近所のコーランの先生にいたるまで、マラブー（宗教指導者）の持つ影響力は絶大である。しかしギニアにおいては、セク・トゥーレ初代大統領がマラブーを恐れ、多くをギニア中部のラベに強制移住させてしまったという経緯もあり、マラブーの影響力はセネガルに比べると弱い。ギニアで「マラブー」というと、黒魔術使いのような後ろ暗いイメージが強いらしく、セク・トゥーレが恐れたのも、宗教指導層の影響力と

30%、スूसー族20%、その他10%（CIA World Factbook 2014, <https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/gv.html>, 2014年9月16日現在）。

³ 当館現地職員2名に、ダカールの人口に占めるギニア人の「体感比率」を訊ねてみたところ、「10～15%」「15～20%」との回答が得られた。両職員ともギニア人の多い街区在住である。

⁴ その他、キリスト教8%、伝統宗教7%（CIA World Factbook 2014, <https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/geos/gv.html>, 2014年9月16日現在）。

いうよりは黒魔術によって自らが陥られる可能性だったようである（このように、ギニアのイスラムは原理主義的である反面アニミズ的な要素も強い⁵）。ギニアのイスラムにおいても宗派のようなものはあるが、信徒たちはマラブーを介さないアッラーとのより直接的なつながりを重視する傾向にある⁶（「純粋な」イスラムの教えにおいては、アッラー以外の「聖人」を崇拝することは邪道ということになる）。そのため、セネガル各地で積極的に商売を行うギニア人といえども、ムリッド教団の総本山であり、マラブーの権力が絶対であるトゥーバなどにはあまり寄り付かないという。

4 ギニア人と女子割礼

セネガルに暮らすギニア人は、女子割礼（FGM）の習慣を持っていることでも知られている。もっとも FGM はギニア人だけの習慣ではなく、セネガル人女性も 28% が FGM を施されているとされる⁷。セネガルにおける女子割礼の実施状況は、民族や宗教、地域によってあまりにも格差が大きく、平均的なイメージといったものが非常に掴みづらいのだが、特にプル族においてこの慣習は根強いとされ、セネガルでも 62.1% のプル族女性が割礼を施されているという⁸。従って、大多数がプル族であると推測されるギニア人移民においても、FGM が広く実践されていることは想像に難くない。特にギニア人移民の多いダカールでは、FGM 廃絶のための啓発活動等が行われる際、ギニア人コミュニティは一大ターゲット・グループである。また、ギニア人が行う FGM は、セネガルで行われているものに比べて体への負担が大きいタイプが多いようにも思われる¹⁰。

5 ギニア人とセネガル人

⁵ セネガルでのエボラ出血熱感染者第 1 号となったギニア人学生（9 月 13・14 日付け *Observateur* 紙のインタビューにおいて、イスラム教徒であることを明かしている）は、報道によると「ギニアの故郷の町に戻り、「清めの儀式」を済ませた後でまたセネガルに戻って来たい」という希望を述べているとのことである。

⁶ ギニア人のタクシー運転手は車内にマラブーの写真を飾っていないことで見分けがつくという。

⁷ Centre de Recherche pour le Développement Humain (Ministère de la Santé et de la Prévention Médicale du Sénégal) et ORC Macro, "Enquête Démographique et de Santé au Sénégal" (2006), <http://dhsprogram.com/pubs/pdf/FR177/FR177.pdf>, 2014 年 9 月 16 日現在。

⁸ 同上。

⁹ 筆者の個人的な印象だが、セネガルで見かける女子割礼廃絶を訴えるパンフレットの類には、大抵プル族の伝統衣装を纏った少女の写真やイラストが添えられているように見受けられる。

¹⁰ 要確認。ただし、筆者はタンバクンダ市で母子保健活動に従事する青年海外協力隊員から、同市では割礼を施された女性は珍しくないが、特にギニア人移民の女性には非常に多く、彼女たちは「出産のときに縫ったところがブチブチ切れるらしい」という話を聞いたことがある。

我々日本人にはなかなか分かりにくいところであるが、セネガル人は服装、職業、話す言葉、仕草、顔立ちなどで簡単にギニア人を見分けることができるのだという。こうしたギニア人に対して彼らが抱く印象は、貧しいとか、不衛生とか、あまり好意的ではないのが現状のようだ。上述のようにギニア人はブティックやレストランの経営など、商売に積極的である。世界中どこでも起こっていることだが、移民が経済活動に参入することで地元民の職が奪われ、摩擦が生じているということでもあるらしい¹¹。セネガル人とギニア人との結婚は、全くないわけではないが、セネガル人のイスラム教徒とキリスト教徒の間の結婚の方がまだ多いということである。上述のように、セネガルに暮らすギニア人移民には独立の頃にやって来て何十年もセネガルで過ごした者や、また当然二世も多いが（ただしセネガルの国籍法は血統主義を採用しているため、セネガル生まれでもギニア人の子はギニア人である）、ギニア人としてのアイデンティティは強力に保たれ続けるようである¹²。

6 ギニア人とエボラ出血熱

セネガルにおけるエボラ出血熱患者第1号がギニア人であったことについても、衛生観念の乏しいギニア人であるから無理からぬこと、と多くのセネガル人が考えている。そもそも今回西アフリカで流行しているエボラ・マセンタ出血熱の発祥の地がギニアであることから、「エボラ出血熱」という耳慣れない呼称に馴染めないセネガル人がこの病気を「ギニア病」と呼ぶことすらある（ギニア人大学生がセネガルにウィルスを持ち込む以前からのこと）。そのような事情も手伝ってか、最初の患者が出て以来、道端で具合が悪くなったギニア人の物売りを、周囲が大騒ぎして医療機関に引っ立てるという事例がダカール市内とジュルベルで相次いだ。今回のエボラ出血熱騒動に際し、インターネット上でギニア人に対する差別的な言説が多く見られたことから、今後長期的にギニア人に対する風当たりが強くなることが懸念される。

¹¹ 同様の現象がセネガルに限らず域内各国で起こっているようである。当館現地職員の一人は、ギニア人を「アフリカのユダヤ人」に例えている。

¹² ダカール市内にギニア人移民の多い街区はいくつかあるが（大体が「下町」的な地区である）、プラトーの裁判所及びルブス刑務所近辺、つまり大使館付近もその一つである。館員がよく昼食を摂りに行くレストランの店主も「プル・フータ」であるが、彼女は親の代に移住してきたセネガル生まれである。にもかかわらず彼女は周囲からギニア人扱いされているし（国籍の上では正真正銘ギニア人であるが）、自分でも民族を訊ねられると単に「ブル族」と言わず、「プル・フータ」と明らかにギニア人であると分かる答え方を（基本的に、多くのギニア人移民が「自分はプル・フータである」と屈託なく名乗っているように思える）。